

二種のマデ節について

—時間タイプと程度タイプ—

小西 正人

抄録:本稿は小野(2007)で提示された「彼は死ぬまでたばこを吸った」という文のふたつの解釈(「彼はたばこを吸ったのでそれが原因で死んだ」および「彼は死ぬまでたばこを吸い続けた」)について、マデ節という形式に焦点をあて、このふたつの解釈が時間タイプと程度タイプに分かれること、また程度タイプのなかでも非継続事象を表すものと継続事象を表すものに分かれることを指摘した。そして具体的には時間タイプのマデ節は「時間軸上の一点を指示し、その特定の点を到達範囲とするマデ節」であるのに対し、程度タイプのマデ節は「さまざまな種類の程度スケール上の一点を指示し、その特定の点を到達範囲とするマデ節」であること、また程度タイプのなかで非継続事象を表すものは程度スケールのみにもマデ節が作用し修飾を行っているのに対し、継続事象を表すものは程度スケールと時間軸において構造保持束縛がなされている(したがって漸次的変化という意味が生じる)ということをも主張した。また移動事象におけるマデおよび関連する構文を扱った先行研究をとりあげ、それぞれの構文との簡単な比較を行った。

キーワード:マデ節, 時間タイプ, 程度タイプ, 程度スケール

1. はじめに

結果構文を扱った小野(2007)に、「厳密には結果構文とは言えないが」という但し書きがついた以下の例文が挙げられている(小野2007:91)。

(1) 彼は死ぬまでたばこを吸った。

小野(2007:91-92)は、この文は「彼はたばこを吸ったのでそれが原因で死んだ」、「彼は死ぬまでたばこを吸い続けた」というふた通りに解釈されるとして、前者を「CAUSE 解釈」、後者を「PATH 解釈」とよんだ。

この例を挙げる前段階として、小野(2007:85-86)は事象構造としての達成事象について述べ、達成事象には大きく分けて CAUSE タイプと PATH タイプの2つのタイプがあるとしている。そこで述べられているそれぞれのタイプについての小野(2007)の説明をまとめると、以下ようになる。

まず CAUSE タイプについては、「達成事象の基本的な事象構造として想定されてきた」もので、「使役構造を原因事象(P(e_1))と結果事象(Q(e_2))からなる複合事象(complex event)と見なし、両者を因果関係(CAUSE)で関係づける」とし、John broke the vase. という文に対して「P(e_1 , john, vase) CAUSE Q(e_2 , vase)」という構造を与えている。また「原因事象が先行し、次に結果事象が起こるという事象の継起性」が必要条件で、「事象の到達点(culmination)は、動詞の語彙的な意味に内在する」と説明されている(小野2007:85-86)。

それに対して PATH タイプとして小野 (2007) は John ran to the store. という文を挙げ、ふたつの事象 (ここでは run (e₁, john) と go-to (e₂, john, store)) を原因・結果の関係と見なさずに「同時展開的 (coextensive) に進行する¹⁾」ものとし、「着点句が動詞の事象をアスペクト限定 (delimit) することによって達成事象を成立させている完結性 (telicity) を決定する」、またここでの「前置詞句の表す経路は、動詞事象の終了点までの長さを測るはたらきをする」としている (小野 2007 : 86)。

本稿では、小野 (2007) によって提示された現代日本語のマデ節における上記のふたつの解釈が、具体的にはどのようなものであり、どのような性質をもつのかということについてより正確に示すとともに、他の関連・類似する構文とのちがいを示す^{2) 3) 4)}。

2. マデ節について

2.1 時間タイプのマデ節と程度タイプのマデ節

本節ではいわゆる従属副詞節として主節を修飾する「動詞⁵⁾ + まで」という形をとる節をみる。

はじめに小野 (2007) がマデ節の解釈として CAUSE タイプと PATH タイプとしたものについて、それぞれの特徴について概観する^{6) 7)}。

まず小野 (2007) が PATH タイプとしたものについて、マデ節は端的にいうと「時間軸上の一点を指示し、その特定の点を到達範囲⁸⁾とするマデ節」としてはたらいっているといえることができる。

(2) a 子規は死ぬまで俳句を作った。 (小野 2007 : 92)

b 学校に着くまで走った。

c 夜が明けるまでつづける。

いわゆる PATH タイプのマデ節をもつ文では、マデ節は時間軸上の一点を指示し、その特定の時点に到達範囲とする継続的事態を主節で表す。(2a) では子規は死の時点まで俳句を作りつづけたということ、また (2b) では学校に着く時点まで走りつづけたことを意味する。本稿ではこのタイプのマデ節を「時間タイプのマデ節」とよぶ。

それに対して小野 (2007) が CAUSE タイプとしたものについては、「さまざまな種類の程度スケール上の一点を指示し、その特定の点を到達範囲とするマデ節」であるといえることができる。

(3) a 完全に壊れるまで壊す。

b 気絶するまで (強く) 殴らなくても…。

c 彼は死ぬまでたばこを吸った。 (小野 2007 : 91)

d 泳げるようになるまで練習する。

いずれも程度スケール上の一点を指示し、その特定の点を到達範囲とした事象を表しているが、それぞれ少しずつその性質を異にしている。(3a) ではマデ節と主節が同じ程度スケール (= 「壊」スケール) をもち、そのスケール上での一点 (完全に壊れた点) を到達範囲とした状態変化を表しているのに対し、(3b) は主節動詞「殴る」に関連の深い「強さ」スケールを導入し、そのスケール上で

の一点を到達範囲とした事象を表している。さらに (3c) では「たばこを吸う」ことによって引き起こされる状態変化を表すための程度スケール (たとえば「健康状態の程度」のようなもの) が導入され、そのスケール上の一点を到達範囲とする状態変化を表している。また (3d) ではそれが「泳ぎに関する習熟度」のようなスケールにおける状態変化を表している。本稿ではこのタイプのマデ節をまとめて「程度タイプのマデ節」とよぶ⁹⁾。

以下、それぞれのタイプの差異を挙げながら、両タイプの性質を詳しくみる。

はじめに時間タイプのマデ節の場合、時点さえ特定できれば「まで」につながるのは名詞句でもかまわない (したがってこの場合はマデ節ではなくマデ句となる)。

(4) その日の3時まで俳句を作った。

それに対し程度タイプの場合、「名詞句+まで」という形で程度上の一点を到達範囲として指定するのは難しいようである¹⁰⁾。以下の例文において、いずれも b 文は時間タイプの解釈しかもつことができないと思われる。

(5) a 病気になるまではたらいだ。

b 発病まではたらいだ。(cf. 発病するまではたらいだ。)

(6) a 時給が1,000円になるまでがむしゃらにはたらいだ。

b^{?)}時給1,000円までがむしゃらにはたらいだ。

始点を表す「から」については、時間タイプの場合は「～てから」などのような形であらわれることができるのに対し、程度タイプの場合は「から」を用いて始点を表すことはできない。

(7) a 夜が明けてから日が沈むまでずっと働いています。

b 出発してから目的地に着くまで一人で運転した。(いずれも時間タイプ)

また意味的に適合する場合に限られるが、時間タイプの場合、「～ときまで」などのような形で時間タイプであることを明示することができるのに対し、程度タイプの場合は「～くらいまで」などのような形で程度タイプであることを明示することができる¹¹⁾。

(8) a 子規は死ぬときまで俳句を作った。(時間タイプ)

b 機が熟するころまで待ちましょう。(時間タイプ)

c 泳げるようになるくらいまで練習しなさい。(程度タイプ)

d 胃痛になるほどまで悩んだ。(程度タイプ)

また時間タイプの場合、マデ節で特定される時点まで主節によって表される事態が継続していることを表すため、主節には状態述語 (「ている」形・習慣的意味などを含む) や「～つづける」などの

形がくると安定する。

- (9) a 幼稚園に行くまでおむつをはいていた。
b こちらに来るまで雪の日には傘をさしていた。
c その人に出会うまで (は) ほんとうに無知だった。
d この薬を入れるまで白かった／赤くなかった。
e 期限になるまで滞在できます。
f 誰かが来るまで大声で叫びつづけた。
g 私が指名するまで発言は慎んでください／待ってください。

それに対し、程度タイプの場合はむしろ主節が否定文であると解釈が難しいようだ¹²⁾。

- (10) a 体を壊すまで医者に行かなかった。
b 体を壊すまで苦痛を訴えなかった。(×「苦痛を訴えなかったのでその結果体を壊してしまった」)
c 病気になってしまうまで無視をした。
d 病気になってしまうまで話しかけなかった。
e 廃案になるまで反対し(つづけ)た。
f 廃案になるまで賛成しなかった。

(10a) の場合、時間タイプの解釈はまったく問題がないが、程度タイプの解釈、すなわち「(頑なに) 医者に行かないことが原因で健康を悪化させ、体を壊してしまった」という解釈は難しいか、不可能である。同じような意味を表す(10c)以下の例においても、肯定形を用いた(10c, e)のほうは程度タイプの解釈(それぞれ「無視をしつづけた結果、それが原因で相手が病気になってしまった」「反対しつづけた結果、廃案となった」)をもつことができるのに対し、主節が否定形である(10d, f)は時間タイプの解釈しかもつことができない。

これはおそらく程度タイプの解釈をもつためには積極的に状態変化を推進させる何らかの原因事象が主節に必要となるにもかかわらず、否定文は「状態」を表すため、その条件に適合しないからではないかと考えられる¹³⁾。

状態ではないが、状態変化を「積極的に」推進させるというわけではない事象(たとえば経験者をもつ事象)も同様に程度タイプのマデ節主節としてあらわれることは難しいようである¹⁴⁾。

- (11) ?*心臓を悪くするまで驚いた。
(たとえば「何度も驚きすぎて心臓を悪くしてしまった」のような意味で)

また状態の程度を特定するために程度タイプのマデ節を用いるときも、主節が単なる状態を表す場合はかなり難しく、その場合は(12b)のように「ほど／くらい」というような程度を明示する表現を用いなければならない(用いない場合は(12d)のように少し文語的な表現となる¹⁵⁾)。

- (12) a ^{??}小さな文字がはっきり読めるまで明るい.
 b ^(?)小さな文字がはっきり読めるほどまで明るい.
 c 小さな文字がはっきり読めるまで明るくする.
 d [?]立ち見の客がでるまでにぎわった.

また時間タイプは期間修飾表現を用いてマデ節が指示する特定の時点までの期間を修飾することができるが、程度タイプは事象前後の程度差を明示できるもの以外は難しいようである¹⁶⁾.

- (13) a ごめんなさいと言うまで 2時間, 責めつづけた.
 b 新しい一步を踏み出すまで 2年間, 私はずっともがきつづけていた.
 c [?]山が見えるようになるまで 600m, 高度を上げた.
 d [?]完全に動かなくなるまで 40℃, 温度を下げた.
 e 彼は死ぬまで 15年間, たばこを吸った. (時間タイプの解釈のみ)

さらに程度タイプのマデ節の場合、意志的な主体による行為事象がマデ節の内容となるのは難しい場合があるようだ.

- (14) a 彼が新聞を読むまで脅した.
 b 彼が新聞を読むようになるまで脅した.
 c 彼は運動をはじめるまで心配していた.

(14a) の場合、時間タイプのマデ節として解釈されるのがもっともデフォルトであるのに対し、マデ節がいわゆる自動詞的な状態変化を表す (14b) の場合は程度タイプのマデ節として解釈されやすい。また文脈が十分に想定可能な (14c) であっても「健康についてとても心配していたので (ついに) 運動をはじめた」という程度解釈はかなり難しい。これは、意志的な主体による行為事象は、程度タイプのマデ節をもつ文の特徴である「主節で表される (あるいは主節に関連する) 事象によって進行する (何らかの) 程度スケール」を構成しにくいためではないかと考えられる。

時間タイプの解釈が難しいものとしては、時点の特定が難しいものや因果関係が明らかなもの、あるいは程度スケール上の点を指示しているのが明らかであるものなどが挙げられる。

- (15) a 怒りがこみ上げてくるまで自慢話を聞かされた.
 b 寝食を忘れるまで没頭した.

2.2 程度タイプのマデ節

例 (3) にも示したとおり、程度タイプのマデ節は、程度スケール上の一点を指示し、その特定の点を到達範囲とするという意味については共通しているが、くわしくみるといくつかの点で異なりをみせる。

まずは表される事象が非継続的であるか、継続的であるかという違いがある^{17) 18)}。主節動詞がマ

デ節と共通の程度スケールを用いるときはそのスケール上の一点を、また異なる程度スケールを用いるとき(程度スケールをもたないときに何らかの程度スケールを導入する場合を含む)にはそのスケール上の一点を特定するというのは両者に共通しているが、事象が非継続的なものである場合、その「特定される程度」は主節の表す非継続事象に関連してその事象を修飾するものの程度であるということが出来る。たとえば(16a)は「壊す程度が「完全に壊れる」程度(まで)」、(16b)は「殴る強さの程度が「気絶する」ほど(まで)」であるということである¹⁹⁾。

- (16) a 完全に壊れる(ほど)まで壊す。
b 気絶するまで(強く)殴らなくても…。 (= 3b)
c 庭の植木鉢が吹き飛んでしまうまで(強く)風が吹いた。

これは程度スケールのみを対象としてマデ節が作用し、到達範囲を特定していると考えることが出来る。そのため、通常の着点(状態)を表す「水温を10℃に下げる」「バラバラに壊す」などの修飾表現をもつ文と同じように、非継続事象を表すことができるのである²⁰⁾。

それに対し、事象が継続的なものである場合は「主節によって表される事象(あるいはそれに関連する事象)が原因となり²¹⁾、その継続(およびその漸次的進行)に随って状態変化も漸次的に進行し、到達点にいたる」という解釈をもつ。この場合の「原因事象の進行」はさまざまな形で表される。

- (17) a 指先が真っ赤になるまでじっと押しつづけた。 (時間)
b 割れ目の先がこちら辺に来るまで割ってください。 (部分)
c おなかがいっぱいになるまで食べた。 (量)
d 出入禁止になるまで迷惑をかけつづけた。 (回数)
e 死ぬまでたばこを吸いつづけた。 (頻度/量)
f 顔が腫れるまで殴った。
g 泳げるようになるまで練習する。 (= 3d)

これは主節に関連する各原因事象内のスケールにおける「進行」が、Jackendoff(1996)や岩本(2008)のいうsp-binding(構造保持束縛)により、マデ節に関連する結果事象の程度スケールにおける「進行」と並行的/同型的に進行し、さらに時間軸とも構造保持束縛がなされるためである。この原因事象の進行を表すため、(17a-c)のように主節動詞が内在する(時間軸を含む)スケールを利用する場合もあれば、事象の複数回生起などの方法で何らかの(程度)スケールを解釈規則などによって作りだし、「進行」解釈をもつようにする場合もある。たとえば(17g)(=3d)は「何度も練習をすることにより少しずつ泳げる状態に近づき、ついに泳げる状態に達した」という意味を表す。

またこの構造保持束縛により、スケール上の終端と時間軸上の終端が関連づけられ、スケール上の特定の点に到達した時点が事象全体の終端となることから、時間タイプとも程度タイプともとれる文がみられることになる。これは、主節に関連する事象が進行するのに随って同時に進行する、特定のスケールをもった結果事象を想定しやすいかどうか(想定しやすいければ程度タイプとして解釈されやすい)という語用論な理由によるものであると考えることができる。

(18) はっきりと見えるようになるまでレンズを交換する.

(レンズ交換によってよりはっきりと見えてくるようになるか, でたらめに交換しているか)

(19) a 警察がくるまで辛抱した. (時間タイプ)

b 血管が切れそうになるまで辛抱した. (程度タイプ)

2.3 マデのはたらき

マデは到達範囲を表すことから, 時間の到達範囲をマデ節にて特定される時間タイプの場合, 非継続事象を表すことはできない. したがって一回的事象をおもに表す動詞が主動詞である場合, たとえば複数回生起などの解釈がなされることになる.

(20) a 人が出てくるまでドアを叩く.

b そこに届くまで石を投げる.

程度タイプの場合, 「主節によって表される事象が原因となり, その継続に随って状態変化も漸次的に進行し, 到達点にいたる」という解釈をもつ (21) のような場合は同じくさまざまな解釈規則が適用されることになる.

(21) a 顔が腫れるまで殴った.

b 彼は死ぬまでたばこを吸った.

それに対し, 非継続事象を表す程度タイプのマデ節の場合は, 程度スケールのみマデ節が作用する解釈となるため, 適用される程度スケールは二値的なもの (中間値をもたないもの) であってはいいないが, 事象自体は時間軸と構造保持束縛はなされず, 非継続事象でも可能となる²²⁾.

(22) 使いものにならなくなるくらいまで (は) 壊してください.

いずれの場合もマデが単なる着点のみを表すのではなく到達範囲を表すことからくる意味的制約であると考えられる. そのため, 程度タイプのマデ節の場合は, 単にふたつの事象が CAUSE で関連していると分析するだけでなく, 何らかの形でマデの意味を生かした意味表示をとる必要がある.

3. 類似する他の構文との比較

本節では, 移動事象を扱った先行研究のなかで, 本稿の扱ったマデ節と類似するものを取りあげ, 本稿で扱ったマデ節との比較を行う.

はじめに, 移動事象におけるマデ句を概念意味論において論じた上野 (2007) を挙げる. 上野 (2007) は移動動詞と共に起るマデ句には 2 種類のあるものと述べ, 非限界事象に時間的限界を与える場合 (例「岸まで 1 時間で走る」) は項となるのに対し, 時間的限界を与えない場合は単なる修飾要素としてはたらく (例「岸まで 1 時間走る」) とし (上野 2007: 128), 前者の解釈をもつことのできるものを移動様態動詞とよび, 「踊る」などの単なる内的運動動詞と区別した. また前者の解釈となる場合

は意味的に節の主従関係が逆転しているとし、「岸まで1時間で走る」の場合は「岸までの移動事象」が主となり、「走る」という移動様態を表す事象はBYやWITHなどの関数を伴って修飾要素となるという分析を行っている。

本稿で扱ったマデ節については、概念意味論（あるいは岩本（2008）の提唱する事象投射理論）における表示をもとにした分析には至っていないため、上野（2007）の主張との直接的な関係を示すことは難しい。ただ本稿で扱ったマデ節はいずれも何らかの限界を与えるものであり、また状態変化をまったく含意しない動詞であっても程度スケールを想定できれば程度タイプの解釈をもつことができるなど、上野（2007）の扱った移動事象におけるマデとはかなり異なったふるまいをみせることを挙げておきたい。

また「新しい経路をつくりだす」という意味では、影山（2003）がとりあげた「非移動動詞と共に起して移動経路をつくりだすマデ句」（例「東京までずっと寝ていた」）がある。これは非移動動詞である動詞「寝る」を主動詞としてもつ文がマデ句と共に起することによって、主体がマデ句で示す場所（この場合は東京）を到達範囲とした経路上の移動を行うという新しい意味をもつという現象である。

本稿との対比でいえば、たしかに「新しい経路をつくりだす」という点では程度タイプのマデ節と共通性はみられるものの、影山（2003）の挙げる文の場合、「マデ句が示す到達範囲に到達するまで主動詞によって表される特定の状態が継続する」という意味を表すが、これは本稿で時間タイプのマデ節とよんだものに近い（継続事象を表す程度タイプのマデ節は、どちらの事象も「進行」する）。また「名詞句+まで」という形をもつことも時間タイプと共通している。

マデという形式をもたないが、程度タイプのマデ節と意味的に類似する例はむしろ影山・由本（1997）がとりあげた英語の *one's way* 構文ではないかと思われる。影山・由本（1997）は英語の *one's way* 構文について、移動の様態 (*inch one's way*)、通路の作成 (*push one's way*)、移動の随伴動作 (*beg one's way*) という3種に分けて考察を行っているが、本稿が扱うマデ節と類似するのはこのうちの *push* 型といわれる構文である。影山・由本（1997）に挙げられている *push* 型の例文をみてみよう。

(23) a He pushed his way through the crowd. (影山・由本 1997 : 182)

b He worked his way up to assistant manager.

-David Jauss, "Glossolalia" (影山・由本 1997 : 185)

影山・由本（1997）では *push* 型の *one's way* 構文について「*push* 型の *one's way* 構文に現れる *one's way* を Jespersen や Goldberg の言うように「作り出された通路」と解釈すると、その構文は（中略）作成動詞の概念構造で分析することができる」（影山・由本 1997 : 183）として以下の概念構造を与えている。

(24) [x ACT (ON w)] CAUSE [BECOME [x's WAY BE [Path]]]

↓ ↓
He pushed

↓ ↓
his way through the crowd (影山・由本 1997 : 183)

これは概略「x = he が push という ACT を行うことにより, x's WAY = his way が through the crowd という場所に出現する」という意味を表しており, 本稿で扱った程度タイプのマデ節が継続事象を表すとき, とりわけ主節動詞がスケールを内在せず, マデ節との共起により新しく程度スケールがつくりだされるときに「主節に関連する事象が進行すると同時にマデ節に関連する状態変化事象が進行する」こと, そしてその2つの事象が因果関係をもつことなどが共通している。

ただ英語の push 型の one's way 構文においては through the crowd のように境界をもたない経路が共起できるのに対し, 本稿で扱った程度タイプのマデ節は「まで」の語義そのものによって境界をもつ(程度的)経路のみが可能である。

(25) 彼は雑念が完全に消えてしまうまで精神を集中させた。

また本稿で扱った程度タイプのマデ節の場合, one's way 構文とは異なり, 複文であることから概念構造がさらに複雑になることも考えられるため, もともと小野(2007)が結果構文を分析するために挙げた文であることも含め, 異同については慎重に分析する必要がある。

4. まとめと今後の課題

本稿は小野(2007)で提示された「彼は死ぬまでたばこを吸った」という文のふたつの解釈について, マデ節という形式に焦点をあて, このふたつの解釈が時間タイプと程度タイプに分かれること, また程度タイプのなかでも非継続事象を表すものと継続事象を表すものに分かれることを指摘した。そして具体的には時間タイプのマデ節は「時間軸上の一点を指示し, その特定の点を到達範囲とするマデ節」であるのに対し, 程度タイプのマデ節は「さまざまな種類の程度スケール上の一点を指示し, その特定の点を到達範囲とするマデ節」であること, また程度タイプのなかで非継続事象を表すものは程度スケールのみにもマデ節が作用し修飾を行っているのに対し, 継続事象を表すものは程度スケールと時間軸において構造保持束縛がなされている(したがって漸次的変化という意味が生じる)ということをも主張した。また移動事象におけるマデおよび関連する構文を扱った先行研究をとりあげ, それぞれとの簡単な比較を行った。

以下, 本稿の問題点と課題を述べる。

本稿は基本的にはこれらの差異について指摘したのみで, それが理論的にもつ意味はもちろん, 強い証拠となる関連現象あるいは推測される予測現象もほとんど示すことができなかった。また当該現象を指摘しただけで, その事象表示を提示することができなかった。またそれに伴い, 程度タイプのマデ節が因果関係という解釈をもつ理由についても考察できなかった。さらに同じように程度を表すことのできる節であるホド節やダケ節などとの比較も行うことができなかった。今後の課題としたい。

注

- 1) その意味では小野 (2007) が例 (1) に対して PATH 解釈として与えた解釈 (「彼は死ぬまでたばこを吸い続けた」) は同時展開的ではなく、したがってここでの説明に厳密にはあてはまらないと思われるが、本稿では問題としない。
- 2) したがって、本稿ではいわゆる従属副詞節として主節を修飾するマデ節を扱い、「家に帰るまでが遠足だ」「彼と張り合うまでになった」のように格助詞を伴って項となるものや、「そうになったら徹底的に争うまで (だ)」などのように判定詞を伴って述語となるものについては扱わない。また「それを盗んでまで手に入れたかった」という「～てまで」の形、およびそれに関連する「人のものを盗みまでして…」「盗む (こと) までした」という、いわゆる極限を表すマデをもつ形も扱わない。
- 3) また連体修飾を行う「～までの」については、以下の理由により原則的には扱わず、本稿で扱うマデ節と関連する限りで扱う。
 1. 連体修飾でなければ「ほど／くらい」などにより程度を明示する必要があるマデ節がある (cf. 注 11)
 2. 「～までに」という形式も連体修飾では「～までの」となる。
 - i) 王女と見まがうまでの美しさ (→ 王女と見まがうまでに美しい)
 - ii) 雲つくまでの大男 (→ 雲つくまでに大きな男)これは連体修飾となった場合、「～までにの」という形がとれないことによる。
- 4) 日本語記述文法研究会編 (2009: 102) に「程度をあらわす「まで」」として「この山頂から見ると日は本当に美しく、神々しいまでだ」「その子の目が異様なまでに輝いて見えた」という例を挙げ、「まで」には程度を表す形式名詞としての用法がある。「神々しい」「異様だ」といった通常とは異なる様子を表す形容詞について、程度のはなはだしさを表す」として (とりたててを表す) マデを扱っているが、本稿のいう程度タイプのマデ節 (後述) とは異なるものである。
- 5) ここでの動詞の形はいわゆるル形となる。山口・秋本編 (2001) の「まで」の項 (pp.751-752) には「活用語の連体形に付く」として「昼は日の暮るまで (麻弓)」「(万葉・488) あるいは「大殿油まゐりて、夜ふくるまでよませ給ひける」(枕・清涼殿の丑寅のすみの) などが挙げられている。また現代語においても動詞以外では「完膚なきまでにたたきのめす」「異常なまでの執念」などの連体形に連なるものとして用いられている。
- 6) 小野 (2007) は結果構文を扱った論文であるため、厳密には両タイプはそれぞれ達成事象の各タイプとして位置づけられているが、本稿ではこの基準をすこしゆるめ、達成事象以外の事象についても言及する。
- 7) 例 (1) と同じくふたつの解釈がなされやすい文もあるが、ここでは比較的ひとつの解釈がしやすい文を選んだ。また因果関係をもつ解釈については判断が難しい文も含まれるが、これについては 2.2 で述べる。
- 8) 影山・由本 (1997: 第 3 章) で、「に」が最終的な着点を表すのに対し「まで」は移動が及ぶ範囲を限定するなどの特徴から、「まで」は到達範囲を表すとの分析を行っている。
- 9) 特定の時点と程度の両方を指示するマデ節については、本稿ではすべて程度タイプとして扱う。その根拠については 2.2 で述べる。
- 10) 以下に述べる「～くらいまで」などの形を除く。

- 11) 「～くらいまで」の形のみが可能となる場合もある。
- i) 英字がプリントされている上着を着るくらいまでならだいじょうぶです。
 - ii) 張り手で相手を圧倒するくらいまでならまだ許せる。
- この場合、「英字プリントくらいまでなら」のように「名詞句＋くらいまで」という形をとることも可能である。
- 12) ただしマデ節を含む全体が否定されている場合（「眠くなるまで（は）勉強しなかった」＝「眠くなるまで勉強する」ということはなかった）は、この限りでない。
- 13) したがって明らかな因果関係が認められ、かつ否定文ではあるが何らかの事象が進行していると解釈できる場合、程度タイプの解釈が可能となることがある。
- i) 電車が止まるまで雪が降った。
 - ii) 電車が止まるまで雪がやまなかった。
- 14) ただし2.2で述べる「非継続事象」にあらわれる程度タイプのマデ節であれば少しは可能かもしれない。
- i) [?]心臓を悪くするまで驚きすぎた。
- また受身形を用いたii)の場合はかなり自然な文となる。
- ii) 心臓を悪くするまで驚かされた。
- （「何度も驚かされて心臓を悪くしてしまった」という意味で）
- 15) 連体修飾の形にすると「小さな文字がはっきり読めるまでの明るさ（を確保してください）」のように「ほど／くらい」を伴わずに用いることができるようである。
- 16) 期間修飾についてはある程度可能なようである。ただしこの場合、維持期間の修飾という解釈がデフォルトとなるが、変化期間の修飾という解釈も十分に可能である。
- c' 山が見えるようになるまで 60分間、高度を上げた。
 - d' 完全に動かなくなるまで 40分間、温度を下げた。
- 17) 非継続事象を表す場合、達成事象とならない。
- 18) 本稿では記述の都合上、「非継続事象であるか継続事象であるか」という対立で程度タイプのマデ節について述べるが、おそらくより本質的には「程度のみを修飾するか、時間軸までの構造保持束縛（cf. Jackendoff 1996, 岩本 2008）を行うか」という違いであると思われる。本稿では区別のより容易な前者にそって述べる。
- 19) ただしこの非継続的な程度タイプは、実際は解釈が少し難しいようであり、場合によっては少し文語的に感じられることもある。2.1で状態的な述語と程度タイプのマデ節との関連について述べたものと同じように、このタイプは「～くらいまで」などの形であらわれたり、状態変化動詞でない場合は程度スケールを明示する表現（(16b)では「強く」と共起したりすることもあるようである。
- i) [?]「好きな人いるの～？」って言われちゃうまで顔に出てたみたいなの。
- 20) したがってこのタイプのマデ節が難しい理由のひとつとして、（着点ではなく）到達範囲を表すマデが用いられている積極的な理由が必要となるためであるということが考えられる。
- 21) ただし「口答えする（ようになる）まで大人になった」のように、単純に「因果関係」とは言いにくいものもあり、今後の課題としたい。

- 22) ただし厳密にいえば, たとえば大きさ (填充性) をもつ対象の増分変化 (incremental change) 事象の場合, その増分主題 (incremental theme) が状態変化を被った「部分の割合」が「程度」と関連し, 動詞自体が内在する程度スケールは二値的であっても可能となる.

文献

- 岩本 遠億. 2008. 『事象アスペクト論』 東京: 開拓社.
- Jackendoff, Ray. 1996. The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even quantification in English. *Natural Language & Linguistic Theory* 14. 305-354.
- 影山 太郎. 2003. 「[東京までずっと寝ていた] という構文の概念構造」, 『國文學』 第 48 巻第 4 号. 37-44.
- 影山 太郎・由本 陽子. 1997. 『語形成と概念構造』 東京: 研究社.
- 日本語記述文法研究会編. 2009. 『現代日本語文法 5』 東京: くろしお出版.
- 小野 尚之. 2007. 「結果述語のスケール構造と事象タイプ」, 小野尚之編『結果構文研究の新視点』 東京: ひつじ書房. 68-101.
- 上野 誠司. 2007. 『日本語における空間表現と移動表現の概念意味論的研究』 東京: ひつじ書房.
- 山口 明穂・秋本 守英編. 2001. 『日本語文法大辞典』 東京: 明治書院.

Two Types of Japanese *made*-clauses: Time-type and Degree-type

KONISHI Masato

Abstract: In Modern Japanese, sentence (1) has two meanings depending on the types of the interpretations for *made*-clauses (Ono 2007).

- (1) Kare wa sinu-made tabako-o sut-ta.
he TOP die -made cigarette-ACC smoke-PST

In this paper I called one interpretation of *made*-clauses “time-type,” which roughly means *until* in English, and the other interpretation “degree-type,” which roughly means *to the extent (that)*, and then characterized their functions as to specify the time- or degree-point which delimits the time- or degree-range of an event. In 2.1 I showed the restrictions, the preferences, and the manner of modifications for each type based on their functions, and then in 2.2 I further classified the two types of degree-type of *made*-clauses, which contrast with whether the sentences represent incremental changes or sudden changes, suggesting that these differences come about due to how *made*-clauses modify the degree scales and the time axes of the relating event(s) in semantics. Then I briefly referred to the contribution of the Japanese particle *made*, which delimits the range of something by specifying the endpoint.

Keywords: *made*-clause, time-type, degree-type, degree scale